

平成 28年 2月 7日

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院心理科学研究科長 殿

主査 中野倫仁



副査 坂野雄二



副査 富家直明



副査 森谷満



このたび 関口真有 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

1 学位論文題目

児童青年期の1型糖尿病患者の血糖コントロールと関連する心理学的要因の検討

2 論文要旨 別添

3 学位論文審査の要旨

児童青年期の1型糖尿病患者は治療としてインシュリン注射を用いなければならないこともあり、両親の管理下で行っていた管理を自己管理に移行させる機会が増加するにつれて、心理的不安や友人関係の複雑さなどの問題が生じることが知られている。そのため、様々な心理学的支援が必要となるが、我が国においてはサマーキャンプの実施などの取り組みに留まっている現状であり、心理学的支援に必要なセルフエフィカシーと血糖管理との関連などの要因の検討が待ち望まれてきた。

本論文では、はじめに、血糖コントロールに関連する心理学的要因とセルフエフィカシーに関する先行研究を展望し、①セルフエフィカシーと自己管理行動に対する結果期待を測定する尺度がないこと、②セルフエフィカシーおよび抑うつ症状とHbA1cとの関連が明らかでないこと、③セルフエフィカシー、結果期待および抑うつ症状が自己管理行動およびHbA1cに与える影響が明らかでないことを見出している。そこで本論文では、これらの問題点の一部を解決するため以下の3つの領域の研究を行っている。

研究1は血糖コントロールとその関連要因の測定法の整備である。自己管理行動に対するセ

セルフエフィカシーを測定する自己評価式尺度として Iannotti らの短縮版 SEDM (2006) の日本語版を患者 43 名のデータから作成し、信頼性 (Cronbach α 係数.85)、基準関連妥当性 (SEDM と HbA1c の間の弱い負の相関 $r = -.34, P < .01$)、内容的妥当性 (小児科専門医により確認) が認められた (心身医学 2013 に発表済み)。また、自己管理行動に対する結果期待を測定する自己評価尺度として Iannotti らの OEDM (2006) の日本語版を患者 77 名のデータから作成し、信頼性 (Cronbach α 係数.79,.77)、基準関連妥当性 (ODEM とセルフケア行動尺度の有意な相関 $r = .35, P < .01, r = -.24, P < .05$)、内容的妥当性 (小児科専門医により確認) が認められた (心身医学で審査中)。

研究 2 は血糖コントロールとセルフエフィカシーと抑うつ症状の関連についての研究である。患者 43 名についての検討で、SEDM 得点、血糖コントロールに必要な自己管理行動に対するセルフエフィカシー尺度 (血糖 SE)、うつ状態尺度である CDI と HbA1c が関連する ($P < .05$) こと、および SEDM 得点と CDI が関連する ($p < .01$) ことを見出した (心身医学 2013 に一部発表済み)。このことから、SEDM 得点を高めることで抑うつ症状が低減し、HbA1c が改善する可能性が示唆された。

研究 3 はセルフエフィカシー、結果期待、および抑うつ症状が自己管理行動および HbA1c 値に与える影響についての研究である。患者 77 名についての検討で、SEDM 得点が自己管理行動および HbA1c に対して有意に影響を与えていることが示された (心身医学で審査中)。

総合考察として、HbA1c と関連する自己管理行動に対するセルフエフィカシーや結果期待は測定することが可能であり、自己管理行動を高める心理学的要因として、自己管理行動に対するセルフエフィカシーの重要性を指摘している。

提出された論文を精査し、口頭発表と質疑応答による面接審査を行った結果、以下のような結論を得た。

(1) 児童青年期の 1 型糖尿病に関する先行研究を適切に展望し、その基本的尺度の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検証するとともに (研究 1)、血糖コントロールとセルフエフィカシーと抑うつ症状の関連について検証し (研究 2)、セルフエフィカシー、結果期待、および抑うつ症状が自己管理行動および HbA1c 値に与える影響を明らかにした (研究 3) ことは、論文構成や解析法などにおいて、博士論文としての所定の水準に達している。

(2) 児童青年期の 1 型糖尿病という対象者が限定される中で、海外で開発された尺度であって本研究のオリジナルではないものの、臨床的に活用できる余地の大きい評価尺度を作成したことの意義は大きい。

(3) SEDM 得点の重要性が示されたが、OEDM や自己管理行動との関連性については先行研究と一致しない結果も得られている。対象者の特性や尺度の技術的側面などが関与している可能性もあるが、本論文の臨床的意義を損なうものではなく、今後の研究者としての研究活動の中で検討を続けていくことを期待したい。

(4) 研究発表会と口頭試問において指摘された意見に対しても適切な回答がなされ、予備審査で指摘した個所に対しても加筆修正が行われ、より完成度の高い論文としてまとめられている。

(5) 以上のことから、本論文は十分な科学性と独創性を持つ学術研究の成果であると判断し

た。

4 最終試験の要旨

最終試験では、学位論文の内容に関する口頭発表および質疑応答を行うとともに、申請者のこれまでの研究業績を精査し、さらに、外国語を含む専門的知識と技術に関して口述試験を行った。その結果、申請者は研究を遂行する能力が十分にあるとの判断に至った。

ある

以上の結果 関 口 真 有 は博士（臨床心理学）の学位を授与する資格が ものと
ない

判定する。